「大分県史—美術篇」を読んで

五島辰夫

—初の県美術史—

この本を手にしたとき、これは大へんな仕事をやってのけたものだな、と驚きに近い感想をいだいたのは私だけではあるまい。

それというのも、一県全体にわたって、原始から現代まで、美術の全領域を包括する、『〇〇県美術史』という書が刊行されたことはおそらくわが国で初めてのことではないかと思ったからだ。私は、そのことを県立図書館で、「県美術史という本をどこかの県で出ていますか」とたずねてみたらやはり「ない」という返事だった。この本はわが国での県美術史の草分けになるかもしれない。

この本の「後記」に「美術篇の構想は写真版とその解説を主とし、実地に見る人、または、見れなくとも郷土の文化財の理解を深めるための資料とすることが最初に考えられた。ところが県史が通史の形式に統一されたので、美術篇もまた、古代から現代に至る美術の変遷と展開を記述するものとなった」とあるように、はじめから県美術史を編むつもりはなかったようだ。だから『大分県史』全体の構想に合わせたい、という外的な要請が少しはあったとしても、こうした前例の殆どない『〇〇県美術史』を作るという仕事にあえて挑戦された執筆陣にたいしてまずは敬意を表したい。

聞くところによると、この『大分県史』は一般の通史が十七冊、別冊として、美術・地誌・民俗・索引の四冊から成りたつという。この美術篇を、ありきたりの県内文化財紹介型の書にせず、本当の歴史として叙述してみたいという意欲が本の出来

ばえにプラスに作用しているところは多々あると思うが、中でも、とくに敬服したところは芸術会館研究員の宗像健一先生の筆になる「江戸時代　第一節　絵画」の項であった。以下これについて述べたい。

―光る豊後南画―

私のような高校の日本史の教師をやっているものでも、この方面については全くの素人であり、まことに表面的なことしか知らないのである。

かつて大分県下に、全国的にみて類のない圧倒的な質と量とを誇る「南画王国」があったこと。そのリーダーは田能村竹田で、彼は唐橋世済などのよき師をもち、封建政治に絶望して政治面から手を引き、自由になって画業にうちこみ、あのような秀れた作品と多くの弟子を残した、というくらいの知識しかないのである。もし、ひとたび高校生から、豊後国にどうしてこれほどの優れた南画家集団が存在したのか、と質問されたら「それは、田能村竹田が偉かったんだよ」と答えにならぬ答えをするにちがいない。

本書中の宗像先生のことばを借りれば、大分県の（絵画史が）「いわば、木に竹をついだとでもいうような絵画史が二豊の地に展開したことは実に新鮮な興味を引く歴史事象である。」として、この間の実情を知りたいと思っている読者の気持ちに真正面から答えようとしてくれているのである。即ち、①十七―十八世紀まではいわば狩野派の時代だが、県下では何故この派の画家にとりあげるべき人物がほとんど出なかったのか。②一八〇〇年になって、突如として豊後に南画王国が出現するのは何故か。③豊後南画の展開を三期に分けて語るとどういう発展・変遷がたどれるか、という風な問題意識から出発して、多くの史資料を使って、論理の飛躍や想像から発する筆のすべりを極力抑制しながら実に説得力のある説明を展開してくれるのである。

文化財の羅列的説明ばかりでは面白くない。私たちは、歴史の中に質の高い「なぞ解き」を期待している。そうした期待にたいして、こういう説明が本当の説明だよ、といっているような好論文である。

全体は七百ページにおよぶ大著ではあるし、郷土史に縁の少い方にはいささか読みづらいし、郷土史をたくさん読んでいる方には「またか」という感じがあるかもしれない。しかし、約五十ページ分のこの部分はとくに光っている。書架の奥にしまわれる前に、まず読んで欲しいと思うのである。私など素人は、こういう論文を読むとすぐ胃を脱いでしまうのであるが、この方面の研究をしている諸賢の中には、また、これとちがった説をもっている方もあろうかと思う。もしあれば読んで検討して欲しいものだ。郷土史にも外野席まで楽しませてくれるような学説論争があった方がよいと思う。

―疑問に思うこと―

私はかつて雪舟のアトリエ＝天開図画楼は大分のどこに建っていたのだろうか、と調べてみたことがある。その時以来、能力も時間もなかったのでまだ本当のところはよくわからないままで終っている。金剛宝戒寺横という説があるが……。

そこでこの本には雪舟について何か書いてあるかと思ったが全く書いていない。彼は、ほんの数年大分に居ただけであるが大分の風物が雪舟芸術に影響していることは「鎮田瀑図」にも明らかである。大分県立芸術会館が一九七七年に催した「大分の美術千年展」にはこの鎮田瀑図（模本）が京都国立博物館から里帰りして展覧されただけに、大分県人からみた雪舟論が欲しかった。

いろいろ注文したいこともあるが、とも角も、初めての大分県美術史の集大成ができたわけで、今後この方面を研究するものには大きい手がかりになろうと思う。「大分の美術千年展」の図録と共に机上におかれることをのぞむ。

（大分県立大分女子高等学校教諭）